

# 彰考館文庫本『後拾遺和歌集』 勘物校註

山之内 恵 子

彰考館文庫本『後拾遺和歌集』（己・三）は、上巻（十巻まで）の零本であるが、作者に関する勘物や、『難後拾遺抄』を引いた歌の内容注記や、詞書に関する考証などが付されていて、それらは当時の『後拾遺集』研究の一端を示すものとして意義深いものといえる。本書に載る作者に関する勘物は、拙稿「後拾遺和歌集作者ノート」(1)～(5)（『芸論叢』六・七号、『立正女子大学短期大学部研究紀要』十三・十四集、『並木の里』三号）で取り上げ、陽明文庫本『後拾遺和歌抄』、太山寺本『後拾遺和歌集』、内閣文庫本『後拾遺和歌抄』などの勘物とあわせて発表した。

本稿では、その本文や詞書に関する注記を翻刻、紹介し、ごく簡単な解説を施すことにする。その際、あわせて彰考館文庫本文をも活性化することにした。

これらの勘物や注記の諸本間の伝流に関しては、各地に散在する諸本の綿密な調査を行わなければならぬし、研究の対象とする証本を見つけて出すことも必要であるが、とりあえず本書勘物を取り上げて、『後拾遺集』研究の一部としたいと思う。

次に本書の簡単な書誌を記しておく。

彰考館文庫本『後拾遺和歌集』は縦二十一・六センチ、横十六・四センチ、八折（一七折は五紙、八折は八紙）から成る列帖装。原表紙は剝落したらしく、現表紙は雷紋つなぎ模様で、題簽は中央上部、美濃紙短冊に『後拾遺和歌集』と記され、内題は『後拾遺和調抄序』、『後拾遺和調抄第一』と記されている。本文料紙は斐紙。墨付八十二丁。歌は一首一行書き、詞書は平均二字下がりで、勘物、朱注が全巻に渡って記されている。江戸初中期の写。奥書はなく、印記は第一丁ウ右下隅に（彰考館）のひょうたん形朱印があり、第二丁ウと第二丁オのとりじめ下部に墨丸印が付されている。

末筆ながら、貴重な資料を利用させていただいた彰考館文庫当局に対して厚く御礼を申し上げます。また、本稿を成すにあたり、資料判読の際にいろいろ御指導いただいた松野陽一先生、増淵勝一先生に心からお礼を申し上げます。

## 凡 例

一、彰考館文庫本『後拾遺和歌集』の本文およびそれに付された注記を

翻刻することを目的とし、八代集抄本『後拾遺和歌集』との校合を行ないその異同を示した。

一、なるべく本文に忠実に翻刻するようにつとめ、本文中の変体仮名や行草体の漢字は、普通の字体に改めた。なお、旧字体は原則として新字体に統一したが、注記中の「哥」などはそのまま記した。

一、各歌の上に国歌大観番号を付し、本文および詞書に関する注記は通し番号を用いて記し、その諸注記の位置を示すために、便宜的に①、②、③とした。注記中の問題のあるものについては「注」として簡単に解説した。

一、本文で使用した略号は次のとおりである。

〔八〕……八代集抄本『後拾遺和歌集』

〔難〕……難後拾遺抄（日本歌学大系別巻一）

〔袋〕……袋草紙（日本歌学大系二巻）

〔抄注〕……後拾遺抄注（未刊国文古註釈大系六巻）

後拾遺和調抄第一巻

春上①

(1) ①哥数百廿七首

〔注〕国歌大観本、八代集抄本ともに「春上」は百二十七首。

② 正月一日によみ侍ける①小大君  
1 いかねておくる朝にいふことそ昨日をこそとけふをことしと

(2) ①入哥五首 ②元旦

〔注〕①小大君の歌は『後拾遺集』に1・455・890・1006・1215の五首が入集する。

みちのくに、侍ける時春立日よみ侍ける

光朝法師母

① 2 出てみよいまは霞も立ぬらん春はこれよりすくとこそきけ

(3) ①立春

春は東よりきたるといふ心をよみ侍ける

源師賢朝臣

3 東路はなこそその関もある物をいかてか春のこえてきつらん」十三丁ッ

春立ける日よめる 橘俊綱朝臣

① 4 合坂の関をや春も越えつらん音羽の山のけさはかすめる

(4) ①元旦送藤経衡許哥也、有返哥、不覚悟

〔注〕①の注記はおそらく、『経衡集』（桂宮本第三巻所収）に「正月ついたちに、としあらたまりて、山辺のけしき、かはりて侍らむかしとて」と詞書して、はりまのかみとしつなの詠じた本歌に対して「あらたまのとしのはじめのかしこきことをみ給へれば、ゆきに

うつもれたるむもれぎも花さく心地してなむとて かへし」と詞書した俊綱の「きみかゝくおとせさりせはをとはやまかすめるはるをいかでしらまし」と返歌のあるところに拠るものであろう。

寛和二年花山院哥合により侍ける

大中臣能宣朝臣

5春<sup>①</sup>のくる道のしるへはみよしのゝ山にたな引霞なりけり

(5) ①此哥合義懐中納言判也、合惟成弁、左勝

〔注〕①の歌合は「寛和二年六月九日内裏哥合」(『類聚歌合』)と『類聚歌合』、一番「霞」、左に本歌がみえる。右は惟成の詠「昨こそあられふりしかしがらきのとやまのかすみはるめきにけり」で、能宣の左が勝となつてゐる。

年籠に山寺に侍けるに今日はいかゝと人のとひ侍ければよめる

6人しれす入ぬと思ひしかひもなく年も山路を越なりけり

山寺に正月に雪のふれるをよめる

平兼盛「十三丁オ

7雪ふりて道ふみまよふ山里にいかにしてかは春はきつらん

題不知

加賀左衛門

8新き春はくれとも身にとまる年はかはらぬ物にそ有ける

①天曆三年太政大臣七十賀し侍ける屏風によめる

②9たつのすむ澤への蘆の下ねとけ汀もえ出る春はきにけり

(6) ①村上御年 ②貞信公也 ③有経信卿難云、汀モエイツル心エヌ

ヨシ ④早春

〔注〕③は「難」に、「これ上手の歌をかきつけられたれば、いとおそろし。あふいで信すべけれど、さはべと云ことばとみぎはといふ言葉、おなじことなるうへに、みぎはにもえいづるとこそいふべけれ。みぎはもえいづるとあれば、にもじいるべうこそおぼゆれ。げにくはしからねど、そのわたりのことなれば、かやうにもよみたるうたもあらん。後略」と「汀もえいづる」という新奇な表現を非難している。

一条院御時殿上人春の哥とてこひ侍りければよめる

10みよし野は春の気色にかすめともむすほれたる雪の下草

(7) ①源氏物語中作紫卷仍号紫

〔注〕①は、紫式部の命名に關しての注記。「紫」は源氏物語「紫の上」、式部は父の官位「式部丞」による。

花山院の哥合に霞をよみ侍ける

藤原長能「十三丁ウ

11玉川の水もいまた消あへぬみねのかすみはたなひきにけり

(8) ①寛和二年哥合哥也、但不入哥也、此哥無家集

〔注〕本歌は①の注記の「寛和二年哥合」には見られず、「寛弘年間

花山院法皇歌合雜載」に見える『平安朝歌合大成』三。また、本歌は国歌大観所収本、桂宮本、群書類従本の「長能集」に見える。注記中の「此哥無家集」とあるのは疑問である。

題不知

藤原隆経朝臣

12 春こと① 野へのけしきもかはらぬはおなし霞や立かへるらん②

(9) ①霞 ②此哥本躰ハ空ノケシキノカハラヌハトアリ

〔注〕②の注記は、「袋」に「もとは空のけしき也、通俊卿被直云々」とあるのに拠る。

和泉式部

13 春霞立やおそきと山川の岩まをくゝる音聞ゆなり①②

(10) ①霞 ②百首始哥也

〔注〕②本歌は「和泉式部正集」「春」の巻頭歌である。

鷹司殿七十賀の月なみの屏風に臨時客の所をよめる

赤染衛門

14 むらさきの袖を運てきたる哉春たつことはこれそうれしき①②

(11) ①霞 ②四位袍 ③臨時客

〔注〕〔抄注〕に「ムラサキノソテトハ紫綬也、四位ヨリハシメテ公卿ミナコレヲキル袍也」とある。また、歌題として注記されている

③「臨時客」は、『古今集』、『拾遺集』では見られなかった新しい歌題であり、文芸性の面から等も『後拾遺集』の意欲的で前進的な

撰集意識が感じられる。

春臨時客をよめる

小弁十四丁

15 むれて来る大官人は春をへてかはらすなからめつらしき哉①

(12) ①臨時客

① 入道前太政大臣大饗し侍ける屏風に臨時客のかた書たる所をよめる

藤原輔尹朝臣

16 紫もあけもみとりのうれしきは春のはしめにきたる也けり②

(13) ①御堂 ②四位五位六位

① 同屏風に大饗のかた出たる所を説侍ける

入道前太政大臣

17 君ませとやりつる使きにけらし野への雉子はとりやしつらん②

(14) ①臨時客 ②大饗

① 民部卿泰憲近江守に侍ける時三井寺にて哥合しけるによめる

読人しらす十四丁

18 春たちて降白雪を鶯の花ちりぬとや急いつらん②

(15) ①隔佐三位子 ②難云依花出谷トイフコトアラハコソカクハヨム

へケレ

〔注〕②は「難」に「鶯は春花のをりなくものなれども、しはずによりて、谷よりいつるといふことのあらばこそかくはよまめ。されば

もとのこゝろにあらずきこゆるはいかゞ」とある。

鶯をよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

19 山たかみ雪ふるすより鶯の出る初音はけふそ鳴なるけ(八)

正月三日あふ坂にて鶯のこえを聞てよみ侍ける<sup>①</sup>

源兼澄

20 ふるさとへゆく人あらはことつてんけふ鶯の初音きゝつと

(16) ① 経信難云、近間也使一人コソイラメ不可歟、難云ヌトイフコトアラマホシ

〔注〕〔難〕に「あふさかの関にて鶯の初音をきゝつていとをかしければよめるか。さらばあふさかにいふことあるべし。さらずはさせることなし。かねもりが、けふ白川のせきをこえぬとよめるはみちのくには、いとほるかなる所の白川の関までゆきて、みやこへつげやらんとよまれたればこそをかしけれ。これはかれをまねびたるが、おとりたれば見ぐるし。なほつげまほしうは、ともの人ひとりしてつげにおこせん、いとやすきことにはあらずや」と兼澄の歌を批判している。

① 選子内親王いつきと聞えける時正月三日上達部あまたまいりて梅かえといふ哥をうたひてあそひ侍けるにうちよりかはらけ出すとて讀侍りける  
読人不知

21 ② ふりつらん雪消えかたき山里に春をしらす鶯のこえゆ(八) 十五丁オ

(17) ① 天曆母、后号大齋、母九条殿女 ② 中務山里イカテ春ノ別ノ哥  
二同、難云ツラン心エヌ

〔注〕本歌は『大齋院御集』（桂宮本第九卷所収）に「むつきの二日」に詠んだ歌とされ、その返歌は「衛門のかみ」の「うくひすのこゑなかりせば雪きえぬやまさといかて春をしらまし」となっている。

ところが、「衛門のかみ」の歌は『拾遺抄』にみられ、これに關して②と同じ注記がある。そうすると『大齋院御集』の「衛門朝忠」が中務の歌を利用したとも考えられる。年代からいって朝忠とする注記には従えず、それにしても「うくひす」の歌の作者は不明といわざるを得ない。また、注記の「ツラン心エヌ」とは〔難〕の「此歌は、もしかきたがへるにやあらん。ふりつらんは、もしふり積るか。」という意か。

加階申けるにたまはらて鶯のなくねを聞てよみ侍ける

清原元輔

22 鶯の鳴音はかりそ聞えける春のいたらぬ人の宿にもゆ(八)

(18) ① 在元真集（この注記は23の歌の右傍注にあり、ミセケチで22に転記されている）

〔注〕「在元真集」とあるが、国歌大観所収本、群書類従本、桂宮本、西本願寺本の「元真集」には見えず、「元輔集」に見られる。たぶんこれは真と輔を誤写したのであろう。

俊綱朝臣の家にて春山里に人をたつぬといふ心をよめる

藤原範永朝臣

23 尋つる宿は霞にうつもれて谷の鶯一こえそする

(19) ① 範永、棟仲、兼長、頼実、経衡、頼家、時人称六人党也 ② 範

永云□兼長者常有可入佳境云々疑云々、此輩思低頼家云々

〔注〕『江記』に「往年有六人党」。範永、棟仲、頼実、兼長、経衡、頼家等也。至三頼家二者彼党頗思低之云々。範永云、兼長者有到佳境之疑上。」とあるのに拠るか。

小野宮太政大臣の家に子日し侍けるによみ侍ける

清原元輔

24 ちとせへん宿のねのひの松をこそほかの<sup>よそ</sup>ためしにひかんとすらめ

(20) ① 貞信公一男

題不知

和泉式部

25 引つれてけふは子日の松に又いまちとせをそのへに出つる」十五丁

(21) ① 百首哥

〔注〕『和泉式部正集』「春」に入集。

正月子日にはにをりて松<sup>と</sup>なんとてすさひに引侍を見て讀る

よみ人しらす

26 春の野に出ぬ子日はもろ人の心はかりをやるにそ有ける

正月子日にあたりて侍けるに良遍法師のもとに子日しになんいつる

いさなへといひにをこせて侍けるに又もとせて日くれにければ読

てつかはしける 加賀成助

27 けふは君いかなる野へに子日して人のまつをはしらぬなるらん

今上六条におはしまして上達部うへのをのこともなど中嶋にわたりて子日しけるに<sup>侍</sup>讀侍ける

右大臣北方」十六丁

28 袖かけて引そやられぬ小松原いつれともなき千代のけしきに

三条院の御時に上達部殿上人なと子日せんとしけるに齋院女房ふな岡に物見んとしけるをとまりにければそのつとめて院にたてまつり侍ける

堀河右大臣

29 とまりにし子日の松をけふよりはひかぬためしにひかるへき哉

題しらす 民部卿経信

30 あさみとり野への霞のたな引にけふの小松をまかせつる哉

承暦<sup>①</sup>二年内裏哥合によみ侍りける

左近中将公実

31 君か代に引くらふれは子日する松の干とせも数ならぬ哉」十六丁

(22) ① 白河院御年

正月七日子日にあたりて雪ふり侍けるによめる<sup>①</sup>

伊勢大輔

32 人はみな野への小松を引に行けさのわかなは雪や摘らん

〔23〕 ① 難云引ニ行スヘラカナラス大方オサナケナリ也

〔注〕 ①は「難」に「この歌は、わかなはゆきやつむらんといへるも、をかしきやうなれども、ひきにゆくとあるこそすべらかにおぼえね。おほよそをさなけるなり」とある。

正月七日卯日にあたりて侍けるにけふはうつつきてやなと通宗朝

臣の①もとよりいひにおこせて侍ければよめる

33 卯杖つきつまゝほしきはたまさかに君かとふひのわかな也けり

〔24〕 ① 難云卯杖ハヨミタレトナホヨクカナヒタルコトコソサモヨメ卯

ツキユカマホシトアラハサモワカナツムニハカナラス杖ヲツクニヤ

〔注〕 「難」に「とぶひ、わかななどゝいへるは、あしうもあらねども、つゑつきつまゝほしきはとよみたれど、おほよそかなひたることを社さもよまめ。うつゑつきてゆかまほしきとあらばこそあらめ。わかなつむには、かならずつゑをやはつくべきとおぼゆるはいかゞ。」とある。

題不知

大中臣能宣朝臣

34 白雪のまたふるさとの春日野にいま打はらひ若な摘てん

和泉式部

35 春日野は雪のみ摘と見しかともおひ出る物は若なゝりける「十七丁オ

後冷泉院御時皇后宮哥合に讀侍ける

中原頼成妻

36 摘にくる人は誰ともなかりけりわかしめし野の若なゝれとも

正月七日周防の内侍のもとにつかはしける①

藤三位

37 数しらすかさなる年を鶯のこゑするかたにわかの(八)なともかな

〔25〕 ① 拾遺抄ニツミタムルコトノカタキハ鶯ノ聲スル方ノ若ナ也ケリ

ト云コソイフナレカシラ取テヨメルカ可然ト不覚哥本ニテヨメル

詮哥ヤアラン

〔注〕 『拾遺抄』第一「春部」に「題よみ人しらす」として「つみたむる」の歌がある「八代」。『奥儀抄』にも「是は拾遺につみたむることのかたきは鶯の聲するかたのわかななりけりといふ歌を思ひてよめるなり」とあって、この歌を本歌として詠んでいる「難」。参照

長楽寺にてふる里の霞の心を讀侍ける

大江正言

38 山高み都の春を見渡はたた一むらの霞なりけり

能因法師

39 よそにてそ霞たな引古郷の都の春は見るへかりける「十七丁ッ

題不知

選子内親王

40 春はまつ霞にまかふ山里を立よりてとふ人のなき哉

① 春なにはといふ所にあみ引を見て讀侍りける

41 はるく／＼とやへの塩路にをく綱をたなひく物は霞也けり

(26) ① 難云、貫之、カケタル春ノツナテハヲノツカラ霞タナヒク物ニ  
ヤアラヌトヤ人アル也

〔注〕〔難〕に「このうたはをかしうよみたるをいかでえらびいれられたるかとして、そのとはきゝたまへざりしは、もしまかせたれば春の霞はおのづからかすみたなびくものにやあらぬと集にいられたるにやあらん。それにはこのうたはかすみのたなびくといふことを本にてあるをとりたれば、さのみこそはあれ。後略」とある。

① 題不知

曾祢好忠

42 ② しみまえてのくみわたる蘆のねの一夜の程にはるめきにける

(27) ① 抄魚網 ② 三百六十首最初哥也

〔注〕『曾丹集』、正月、「春のはじめ」の巻頭歌。①は41に関しての注記である。

正月はかりつの国に侍ける比人のもとにいひつかはし侍ける

能因法師

43 心あらむ人に見せはやつこの国の難波渡の春の気色を

(28) ① 寄名所

題しらす

讀人不知<sup>十八丁</sup>

44 難波かた浦ふくかせに波たてはつのくむあしの見えみみえずみ

春駒をよめる

権僧正静円

45 あはつ野のすくろの薄つのくめは冬立なつむ駒そいはゆる

① 長久二年弘徽殿女御哥合し侍けるに春駒をよめる

源兼長

46 立はなれ澤へになるく春駒はをのか影をや友とみるらん

(29) ① 閑院太政大臣女、義子也

屏風絵に鳥おほくなみゐて旅人の眺望する所をよめる

藤原長能

47 ① かりにこは行ても見ましかた岡のあしたの原に雉子鳴也

(30) ① 難云水鳥ナトミナヤアリケンキヌストヨメルイカン

〔注〕①は、「難」に「もしゆきどころにやありけん。たゞしこの歌のたいは、とりおほくむれるたるとかきたるを、みづどりなどもやありけん。さらばきゞすとよまれたるをいかゞあらん。鳥なればいづれもおなじことか 後略」とある意。

題しらす

和泉式部

48 秋までの命もしらす春の野に萩の古根を焼とやく哉<sup>十八丁</sup>



後冷泉院御時きさいの宮の哥合にのこりの雪をよめる

藤原範永朝臣

49花ならておらまほしきは難波えの蘆のわか葉にふれる白雪

(31) ① 或人云範永朝臣妻、哥云々

〔注〕「天喜四年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合」九番、「春雪」、左に「範永妻」の詠として本歌が見える『平安朝歌合大成』四

屏風絵に梅花ある家に、おとこきたるところをよめる

平兼盛

50梅かゝをたよりのかせや吹つらん春めつらしく君かきませる

ある所の哥合に梅をよめる

大中臣能宣朝臣

51梅の花にほふあたりのたくれはあやなく人のあやまたれつゝ〔八〕

春のやみ〔八〕あやなしといふことをよみ侍ける

52春の夜の闇にあれば句くる梅よりほかの花なかりけり十九丁オ

〔注〕本歌には作者の記名がない。八代集抄本、国歌大観本では「前大納言公任」と記名する。

題不知

大江嘉言

53梅の香を夜はの嵐の吹ためて櫃のいた戸のあくる待けり

(32) ① 経信卿難云ヨメリシ人ノ云々ハ、軒ノアラシノ吹メテマキノ

板戸ノアクル待ケルトソ

〔注〕〔難〕に「いとをかしきうたなり。たゞしこれよみたるひとの、この歌かたりしは、梅のかをよものあらしのふきたためてとこそ。もしかもじにかきたるにやあらん。此定なりしこそいますこしまさりたれ。」とあり、〔袋〕にも「前略夜半の嵐の吹きたためて、荒涼也。又あくるは夜の明るにそへむとや。わろく成にたりと云々、尤有謂事歟。」とあって、始め「軒に嵐の吹ためて」と詠んだのを、通俊が、夜の明けるに添えて手を入れた由が経信に非難されている。

村上の御年御前の紅梅を女蔵人ともによませさせ給けるにかはりて

よめる

清原元輔

54梅花かほことくゝにほはねとうすくこくこそ色は開けれ

山里に住侍ける比梅花をよめる

よみ人しらす

55我やとののきの梅のうつり香に独ねもせぬ心ちこそすれ

前大納言公任

56わか宿のさかりにくる人はおとろくはかり袖そ匂へる十九丁

和泉式部

57春はたゝ我宿にのみ梅さかはかれにし人も見にときなまし

山家の梅花をよめる 賀茂成助

58 梅の花桓根に匂ふ山里はゆきかふ人の心をそみる

春風夜芳といふ心をよめる

藤原顛綱朝臣

59 梅花かばかりにほふ春の夜の闇は風こそ嬉しかりけり

梅花をりてよみ侍ける

素意法師

60 むめかえをくれはつゝれる衣手に思もかけぬ移香そする」二十丁オ

① 太皇太后東三条院にてきさきにたゝせ給ひけるに家の紅梅をうつし

うへられて花の盛に忍にまかりていとおもしろくさきたる枝にむす

ひ付侍ける 弁乳母

61 かはかりの匂ひなりとも梅花しつのかきねを思ひわするな

③③ ① 四条宮宇治殿女

題不知 大江嘉言

62 我やとにうへぬ許そ梅花あるしなりともかはかりそ見ん

清基法師

63 かせふけはをちの桓根の梅花か我宿の物にそ有ける

道雅三位の八条の障子に人の家に梅木ある所に水なかれて客人きた

る所をよめる」二十丁ウ

64 尋つる人にも見せん梅花ちるとも水になかれさらなん

水邊梅花といふ心を 平経章朝臣

65 す多結ふ人の手さへや匂ふらん梅の下行水のなかれは

長楽寺に住侍りける此三月はかりに人の許にいひつかはしける

上東門院中将

66 思ひやれ霞こめたる山里に花まつほと春のつれ〜

題不知 小弁

67 ほにいてゝ秋と見しまに小山田を又うちかえず春もきにけり

帰鴈をよめる 赤染衛門

68 かへる鴈雲井遥になりぬ也又こん秋もとをしと思ふに」二十一丁オ

藤原道信朝臣

69 行かへる旅に年ふる鴈かねはいくその春をよそにみるらん

③④ ① 難云異域ハ□春歎如何ミチノ程二年ヲヘハコソカクハイフヘキ

〔注〕〔難〕には、「春は花のあるをなどよまれたらばこそげにとも

おぼえぬ。たゞ春をなむよそに見るとあらんはなにごとのいみじか  
るべきぞ。またゝびにとしふとは、みちのほどにとしをへばこそ、

かくはよまめとおほゆるは、ひかことをおもひたまふるにや」とあ  
る。

馬内侍

70 とくまらぬ心そ見ゆる（八）帰鴈花のさかりを人にかたるな

津守国基

71 うすゝみにかく玉机と見ゆる哉かすめる空（八）にかへるかりかね

(35) ①此哥ハ右衛門尉孝善ニ鬻ノ秀哥ヨマレテ歎ニ成テ数日不食ニテ  
ヨムイテタル哥也、彼哥云鶯ノ鳴音ヤ何ノ色ナラムキケハミニシ  
ム春ノ明ホノ

〔注〕〔袋〕に「右衛門尉孝善詠云『鶯の初音や何の色ならむきけば  
身にしむ春の曙』住吉神主国基在比座」。己秀歌被讀之由ヲ存不  
安有て、其夜不食ニ成て、無他事一案和歌。扱うす墨に書玉机と  
みゆるかなと云歌は讀也。其後人々を招て、出帰鴈題、取出此  
歌。人々褒譽、仍散遺恨云云」とあり、〔抄注〕にも同じような  
内容の注記がある。

辨乳母

72 折しもあれはかに契りて雁かねの花のさかりにかへりそめけん

屏風に二月山田うつ所に帰雁などある所をよみ侍ける

大中臣能宣朝臣

73 かりかねそけふ帰なるを山田のなはしろ水の引もとめなん」二十一丁

(36) ①有経信難

〔注〕①〔難〕に本歌は見当らず、この注記は疑問である。あるい  
は今日伝わっていない『難後拾遺抄』が存在していたのかもしれない。  
い。

① 天徳四年内裏哥合に柳をよめる

坂上望城

74 あら玉の年をへつゝも青柳の糸はいつれの春かたゆべき

(37) ①村上御年 ②小野宮殿判、合兼盛、勝左

〔注〕「天徳四年三月卅日内裏哥合」四番「柳」、左に本歌が見える  
『類聚歌合』と。右は兼盛の詠「さほ姫の糸染めかくる青柳を吹きな乱り  
その研究」。そ春の山風」で、この右兼盛の歌が勝となっていて、注記と異なっ  
ている。誤写か。

柳池の水をはらふといふ心をよめる

75 池水のみ草も閑て青柳の拂しつえに任てそ見る

題しらす

藤原元真

76 あさみとりみたれてなひく青柳の色にそ春のかせもみえける

二月はかりに良暹法師の許にありやとをとつれて侍ければ人々く  
して花見になむいてぬるときつねはいざなむものをとおもひ

て「尋てつかはしける  
二十二丁オ

藤原孝善

77 春霞へたつる山の麓まで思しらすも行心かな  
ハッハ

人々花見にまかりけるをかくとも告侍らさりければつかはしける

藤原隆経朝臣

78 山桜見に行道をへたつれば人のこゝろそ霞なりける

二月の比おひ花見に俊綱朝臣のふしみの家に人々まかりけるに誰と  
もしらてさしをかせて侍ける

皇后宮美作

79 うらやましいる身ともかな梓弓ふしみの里の花のまとるに

花見にまかりけるにさか野をやきけるを見て「よみ侍ける  
二十二丁

加茂成助

80 こ萩さく秋まであらは思出んさかのを焼し春はその日と

38 ① 難云思出てモ何事ニ侍り

〔注〕〔難〕に「これはおもひいでてなにことのいみじかるべきとも  
みえずこそ」と本歌を難じている。

題しらす①

81 桜花さかはちりなんと思ふよりへても風のいとほしき哉

39 ① 以家集号山人

〔注〕『和歌色葉』・『二中歴』<sup>第十三</sup>『名人歴』に永源法師が山人と号されていた  
事実を記している。

中原到時

82 梅か香を桜の花ににほはせて柳の枝にさかせてし哉

橘元任

83 あけは先尋<sup>そハ</sup>に行山桜これはかりたに人にをくれし

① 一条院御時殿上<sup>のハ</sup>人々花見にまかりて女のもとにつかはしける

源雅道朝臣

84 おらはおしおらてはいかゝ山桜けふをすくさす君にみすへき<sup>二十三丁オ</sup>

40 ① 円融院御子

返し

盛少将

85 <sup>①</sup>をらてたゝかたりにかたれ山桜風にちるたにおしき句を

41 ① 難云意趣本歌ニ相違唯惜花如何 カタリニカタレモタゝ人ノ物

□ヤウ也<sup>云</sup>

〔注〕〔難〕は「本歌のこゝろは、この花をりてきみに見せんとおも  
ふにはなををらんはをし、いかゞせんとなり。さらばそのこゝろぞ  
しのほどをこそいはめ。たゞはなをのみをしみるはいかゞあるべ  
からん。またかたりにかたれといへるはたゞ人のものいふやうにこ  
そおぼゆれ」と述べている。

「殿上人々花見にまかりける道に中宮の御かたよりとて、人にかはりて  
後冷泉院の御時上のおのことも花見にまかりて哥など讀て高倉一宮  
かほしける(八)  
の御方にもてまいりて侍けるに

一宮駿河

86 思ひやる心はかりは桜花たつぬる人にをくれやはする

(42) ① 難云ヲクルト云コトハマカ〜シハレニイタス哥ニハイカ〜

〔注〕本注記は「難」に「うたの心はいはれたれども、人におくる」といふことはいま〜しきこそおもひならはしたれ。いとはれにいださんうたには、いかゞあるべからん」とあるのに拠らう。

① 今上の御時殿上人々花見にまかりて出ける道に中宮の御方よりとて人にかはりて遣しける

87 あくかるゝ心はかりは山さくら尋る人にたくへてそやる」二十三テウ

(43) ① 白河院

障子の絵に花おほかる山里に女ある所をよみ侍ける

源兼澄

88 今こんと契し人のおなしくは花のさかりをすくささらなむ

題不知① 祭主輔親

89 いつれをか分て折まし山桜心うつらぬえたしなけれは

(44) ① 上東門院判官代

〔注〕この注記は、前の88の作者の兼澄に関しての注記である。

藤原為言

90 行とまる心そ春はなかりける花に心のあらぬかきりは

とをき花をたつぬといふ心をよめる

小弁

91 山桜ころのまゝに尋きてかへさそみちのほとはしらるゝ

長樂寺に侍ける比齋院より山里の桜は三千四百イカ〜とありければよみ侍ける 上東門院中将

92 にはふらん花の洛の恋しくてをるに物うき山さくら哉

白河院にて花をみてよみ侍ける

民部卿長家

93 あつまちの人にとはゝや白河の関にもかくや花は匂ふと

見南殿桜 高岡頼言

94 見るからに花の名たての身なれとも心は雲のうへまでそ行

うへのおのことも哥よみ侍けるに春の比花によすといふ事をよみ侍ける 大式実政」二十四テウ

95 春ことに見るとはすれと桜花あかても年のつもりぬる哉

(45) ① 寛治二年十一月卅日配流云々 正八幡宮事

〔注〕この注記に関して、『中右記』十一月三十日条に「陣定ヲ行ヒ、

前大宰大貳藤原実政ヲ伊豆ニ、目代源時綱ヲ安房ニ、廳官八人ヲ土佐ニ流ス」とあり、またその配流の理由については、『百練抄』に

「二月一日、諸卿定申宇佐宮神人訴申、檢校公則盜取黄金、并大貳実政射危正八幡宮神輿事」とある。

花をおしむ心をよめる 大中臣能宣朝臣

96 桜花匂ふなこりにおほかたの春さへおしくおもほゆる哉

河原院にて遙に山さくらを見てよめる

平兼盛

97 道とをみゆきては見ねと桜花こゝろをやりてけふはかへりぬ

(46) ①此度、元輔、兼澄、兼雅、兼慶、安法等者、惠慶假名序書也

〔注〕①の注記中の「此度」とは、詞書中の「河原院にて」の歌会を示すか。河原院は、河原左大臣源融の邸宅。そこを場として活躍した歌人達については、『安法法師集』、『惠慶法師集』等をご参照ねがいたい。

夜思桜といふ心をよめる

能因法師

98 桜さく春はよるたになかりせは夢にも物はおもはさらまし

(47) 以下在新撰春下 難云何事トモ不覚不審

〔注〕「以下在新撰春下」は、本歌以下『新撰』春下に入集されると

解されるが、この『新撰』が何を意味しているか不明である。後考を俟つ。

桜をうへおき(八)て主なくなり侍にければよめる」二十五丁オ

読人不知

99 うへをきし人なき宿の桜花匂はかりそかはらさりける

とをき所にまうてゝ帰る道に山の桜を見やりてよめる

和泉式部

100 都人いかにとはゝ見せもせんかの山桜一えたもかな

題しらす

101 人も見ぬ宿に桜をうへたれば花もてやつす身とそなりぬる

(48) ①百首哥

〔注〕『和泉式部正集』春に入集する。

102 我宿の桜はかひもなかりけりあるしからこそ人も見にくれ

道命法師

103 花見にと人は山へに入はてゝ春は都そさひしかりける

紫式部」二十五丁ウ

104 世間をなに歎かまし山桜花見る程の心なりせは

なげかしき事侍ける比花見てよめる

藤原公経朝臣

105 花見てそ身のうきこともわすらるゝ春は限のなからましかは

堀河右大臣九条の家にて毎山はるありといふ心をよみ侍ける

前中納言顕基

106 我やとの梢はかりと見し程に四方の山へに春はきにけり

(49) ①後一条院長元九年四月七日崩廿二日奉遷上東門院此日於大原出家上年卅七時人落涙云々

題不知 藤原元真

107 おもひつゝ夢にそ見つる桜花春は寢覚のなからましかは

承暦二年内裏哥合によめる」二十六丁オ

右大辨通俊

108 春のうちはちらぬ桜とみてしかなさてもやかせのうしろめたきと

(50) ①合讀岐守顕秀、勝右

〔注〕①の歌合は「承暦二年四月廿八日内裏歌合」、四番「桜」、右に本歌がみえる。左は讚岐守顕季朝臣の「たづね来ぬさきには散らで山桜みるをりにしも雪と降るらむ」で、本歌が勝となっている。

屏風旅人花みる(八)に旅客花所をよめる

平兼盛

190 花見ると家路にをそくかへる哉まち時すくといもやいふらん

屏風の(八)に三月花宴する所にまうてきたる所をよめる

110 一とせに二たひもこぬ花なれはいとなくけふは花をこそみれ

後冷泉院東宮と申ける時うへのをのことも花見むとて雲林院にまかれりける殿上(八)によみてつかはしける

良暹法師」二十六丁ウ

111 うらやまし春の宮人打むれておのか物とやはなをみるらん

(51) ①先一条院殿上人月ミルニ或人送哥云ウラヤマシ雲ノ上人ウチム

レテヲノカ物トヤ月ヲミルラン

〔注〕〔袋〕に「一条院御時、殿上人共月見シ中に、或人送る歌『浦山し雲の上人うちむれておのが物とや月を見るらん』とある。〔抄注〕にも同じ内容の注記がある。

通宗朝臣能登の守に侍ける時国にて歌合し侍けるによめる

源緑法師

112 山さくら白雲にのみまかへはや春の心の空に成らん

宇治前太政大臣花見になんときゝてつかはしける

民部卿済信

113 いにしへの花見し人は尋しを老は春にもしられさりけり

(52) ①戸部長元八年三月廿三日頓死云々

つゝしむへき年なれはありくましきよしひ侍けれと三月はかりに  
白河にまかりけるを聞て相模か許よりかくてありけるはといひにを  
こ二せて侍けるはよめる一  
二十七丁オ

中納言定頼

114 桜花さかりになれば古郷のむくらの門もさゝれさりけり

〔注〕〔難〕に「ふるさとゝは、たゞふるくなれるいへをいふか。さ  
らばいはれたり。もしすまぬいへをいはゞいかゞあらん。これはな  
らのみやこのことをよむよりおこりたることゝぞ、きゝたまへし」  
とある。

〔注〕〔難〕に「ふるさとゝは、たゞふるくなれるいへをいふか。さ  
らばいはれたり。もしすまぬいへをいはゞいかゞあらん。これはな  
らのみやこのことをよむよりおこりたることゝぞ、きゝたまへし」  
とある。

遠花誰家そといふ心をよめる

坂上定成

115 よそなからおしき桜のほひ哉たれ我宿の花と見るらん

年ごとに花を見るといふ心をよめる

源縁法師

116 春ことに見れともあかす山桜としにや花の咲まさるらん

賀陽院の花さかりに忍ひて東西の山の花見にまかりてありきければ  
宇治前太政大臣聞付てこの程いかなる歌かよみたるなとはせて  
侍ければ久しくあなかに侍てさるへき歌なども讀侍らすけふなにか  
高八  
サシ  
二十七丁

くおもほゆるとてよみ侍ける

能因法師

117 世の中を思ひすてゝし身なれ共心よわしと花にみえぬ付八

これを聞て太政大臣いとあはれなりといひてかつけ物なとして侍り  
けりとなむいひつたへたる美作に罷くたりけるにおほいまうちきみ  
のかつけもの事をおもひ出て範永朝臣の許につかはしける

118 世ゝふともわれ忘れめや桜花苔のたもとに散てかゝりし

高倉の一宮の女房花見に白河にまかれりけるによみ侍ける

伊賀少将

二十八丁オ

119 何事を春のかたみに思はましけふ白河の花見さりせは

内のおほいまうちきみの家にて人々さけたうへて哥よみ侍けるには  
るかに山桜をのそむといふ心をよめる

大江匡房朝臣

120 高砂のおのへの桜開にけりとやまのかすみたゝすもあらなん

〔注〕〔難〕には本歌は見えない。

遠山桜といふ心をよめる

藤原清家

121 吉野山やへたつ峯のしら雲にかさねてみゆる花桜哉



周防にまかりくたらんとしけるに家の花を「おしむ心人々よみ侍けるによめる  
藤原通宗朝臣  
二十八丁ウ

122 思ひをく事なからまし庭桜ちりての後のふなてなりせは

以上第一卷「春上」

花のもとにかへらんことをわするゝといふ心を読む

良暹法師

123 とふ人も宿にはあらし山桜ちらて帰し春しなけれは

① 基長中納言東山に花見侍けるに布衣きたるに法師ナツして誰としらせて

とらせ侍ける

加賀左衛門

124 ちるまでは旅ねをせなん木の本にかへらは花の名たてなるへしらまし

(55) ① 君中納言 ② 三条内大臣

① 東三条院の御屏風に旅人の山の桜を見ナツるところをよめる二十九丁ウ

源道濟

125 散ナツはてゝ後や帰らん古郷も忘れぬへき山桜かな

(56) ① 円融院母后法興院女 ② 於任国死去

同御屏風の絵に桜花おほくさける所に人々のあるをよめる

126 我宿に散みちにけり桜花ほかには春もあらしと思ふ

大納言公任花のさかりにこんといひてをとつれ侍らさりけれは

中務卿具平親王

127 花もみな散なん後は我宿に何につけてか人を待へき二十九丁ウ